

# 環境とコミュニケーション

## Environment and Communication

福 井 有  
FUKUI Yu

### (1) 環境とコミュニケーション

人間の社会の進歩の順は「血縁社会」に始まる。血のつながった人たちが集って共同体を作っていた。やがて農耕社会になると、土地を共有し水を管理する「地縁社会」になり、村落共同体ができる。

その後近代工業社会になると、血縁社会も地縁社会も衰退して、「職縁社会」が生まれる。つまり同じ職場を縁とする社会で、仕事を離れてゴルフやカラオケに行くのも職場の人間と一緒に。職場結婚などを見ても、これが職縁社会の縮図といえよう。

この職縁社会に基づく人間関係が崩壊の方向へ進み、個人の価値観や思想、趣味などを含む情報の共有によって形成される新しい人間関係が生まれようとしている。これがネットワーク上の市民、すなわちネチズンの誕生である。

今後、マルチメディアの職場感が高まり、そしてこれが広く普及するとコミュニケーションは「場所」という束縛から少しずつ開放され、ネットワークのサイバースペース上での活動やコミュニケーションの「情報縁」さらには「好縁」といったものが誕生する時代が、到来しつつある。

森岡正博は『意識通信』（筑摩書房、1993）の中で、こうした電子ネットワークの中で架空に成立する場所、地域を超えた「匿名性のコミュニティ」を「地域性のコミュニティ」「共同性のコミュニティ」と並ぶ第3のコミュニティとして位置づけている。

環境とコミュニケーションの関係を考えると次のような概念図になる。

主に口伝えですべてのコミュニケーションが行われていた太古の時代は、人間は自然に従属して生活していた。コミュニケーションの手段としては肉声に加え打楽器、のろし、笛などが用いられたが、その伝達範囲は人間の視聴覚の範囲に限られていた。

中世になるとグーデンベルグ（15世紀）により活字の印刷技術が発明される。また、近代になり電信・電話が普及し、コミュニケーションの範囲は情報の大量分配・大量複製が可能になり飛躍的に拡大する。

ここで言う環境とは、まわりを取りまいてる外界のことをさすのだが、環境には「う

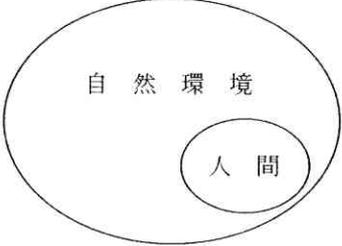
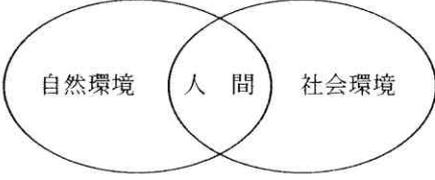
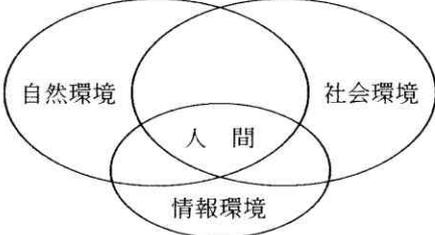
ち」と「そと」があり、その「境界」があるということを認識しなければならない。

人間にとっての環境は自然環境と社会環境に分けることができる<sup>1)</sup>。「自然環境」とは太陽・地球・海・山・川・水・土・空気のような無生物と、植物と動物のような生物の両方を含み、つまり人類の活動とは関係なしに秩序づけられ、進化している「客観的な所与」のことを意味する。

「社会環境」とは人間の集団や組織、制度など我々を取り巻く人間の社会が環境として作用することを意味する。人は特に言語をはじめとするさまざまなシンボルをつくり出す能力をもち、それらを相互行為のメディアとして用いて他の人間とコミュニケーションする高度の能力を有している。

また人は長い間暑さ、寒さ、風、雨などのきびしい自然環境に生活様式を変えることにより対処してきたが、技術を開発することによって環境の側を変える能力を身につけた。

環境とコミュニケーションの歴史的関係

	コミュニケーションの方法	特 長
太古（口伝えの時代） 	声 打楽器 のろし 笛	人の視聴覚能力の範囲
中世～近代（活字の時代） 	電信 電話 印刷 ラジオ テレビ ファクシミリ	大量複製 大量分配 一方向性
現代（情報文化の時代） 	光ディスク 磁気ディスク インターネット eメール CD-ROM	双方向性 同時性 ネットワーク

この「適応」する、つまり生物が環境に適応するように自己の形態・習性などを変化させる能力は、他の生物が種のレベルにおいてのみ可能なことに比べ、人間はテクノロジーによって自然の一部を加工し改変することも可能ならしめた。

前慶應大学教授の富永憲一によると、この社会環境は4つのサブシステムから成り、それらは経済システム、政治システム、文化システムと狭義の社会システムである<sup>2)</sup>。

経済システムとは、人間は生活に必要なものを生産し、交換し、消費するこの経済システムに関連して、人間は金融や流通、貿易などの経済制度をつくっている。政治システムとは、人間は他の人間を権力によって支配し、コントロールしている。これらの政治システムに関して、議会、政府、行政、司法などの政治制度をつくっている。

文化システムとは、科学、哲学、芸術、宗教、価値、生徒などの文化的価値体系をつくっており、それら一つ一つではすべて境界の間にいる人間にとって環境を構成している。

狭義の社会システムとは人間は互いに集まって社会集団（家族・学校・企業・国家など）地域社会（近隣・町・村・都市・国民社会など）、および準社会（社会階層・民族・種族・国際社会など）をつくっている。

これらの社会集団・地域社会・準社会の一つ一つはすべて境界の内にいる人間にとって環境である。

現代は情報化社会であることは言わずもがなであるが、福澤諭吉は100年前にそれを見していた。氏の「文明論之概略」（1879）に次のような下りがある<sup>3)</sup>。

西人の言に、電信は世界の面を狭くしたりと、余はすなわち云く電信に蒸気を交え用いれば、時を縮めて事を多くし、以って人の寿命を長うすと。（中略）

語に云く、智極まりて勇生ずと。余を以って以語を解すれば、智とは必ずしも事物の理を考えて工夫するの義のみに非ず、聞見を博くして事物の有り様を知ると云う意味にも取可し。即ち英語にて言えば「インフォメーション」の義に解して可ならん。

文明とはあらゆる分野で交通が盛んになること、つまりコミュニケーションを頻繁にすることでもたらされる。その影響は精神にもおよび、さらにインフォメーションの交換とエネルギーとの結合が時空を短縮すると、当時「情報」という日本語がなかった時代にその重要性を説いている。

さて、メディアという言葉をここで整理しておきたい。メディアとは個人から個人へ、シンボルを運ぶ伝達の媒体である。言語はシンボルであるとともに、相互行為を媒介するからメディアでもある。

人類は太古の狩猟・採集社会の時代、音声をメディアとする話し言葉を使っていたが、文字をメディアとする書き言葉はもっていなかった。文字の出現は農耕社会の段階まで待

たねばならない。そして、近代産業社会の段階になって印刷技術が開発され、活字が本や雑誌として大量にコピーされ、遠隔地に運ぶことが可能になった。

さらに、電信・電話などのアナログ・メディアにより、その時間が大幅に短縮された。そしてコンピュータの発明により、当初は計算の道具であったパソコンがネットワークされることによりコミュニケーションの機能を備えることになり、現代ではwwwなどの地球規模のグローバル・コミュニケーションが可能になったと言えるだろう。

## (2) 情報文化の時代の特長

さて、情報環境が整った社会をあえて情報文化の時代と呼ぶとすれば、その特長を考えてみたい。

第1の特長は「参加」という概念である。京都大学稲垣耕三助教授によると、インターネットや携帯電話、CD-ROM、さらにはテレビゲームもカラオケも、1兆円以上の大きな産業に成長したが、新しいメディアを大きな産業に育てようとするとき、これらは「参加型」という特長があると述べている<sup>4)</sup>。

インターネットとは「ネットワークのネットワーク」という意味で、世界中のコンピュータ・ネットワークを結びつけて、情報ネットワークの中に仮想的な社会をつくりだす。インターネットに接続することは、それだけで新しい社会に入っていくようなもので、ある種の興奮を覚えるのは筆者だけではなからう。

つまり分かりやすい例でいうと、手紙に切手を貼り付けて、郵便ポストに投函する行為を考えると良い。ホームページを作成するという作業は、手紙はポストに投函しなければ配達されないのと同じように、インターネットもアドレスを登録してアクセスしなければ参加できないものである。

このアクセスするという積極的参加がなければ電子会議もチャットもeメールも成立しないということは、一方ではパソコン通信のネックでもある。

つまり好き嫌いは別にして、電信コミュニケーションに参加できるユーザーと、できないユーザーの問題、つまりコミュニケーション・ハンディキャップの問題が現存する。

2つ目の特長は「匿名性 (anonymity)」という概念である。

人は顔で自己表現をしており、コミュニケーションをとっている間、相手の顔を見て、その気持や言葉に表れない細かい感情を読み取っている。つまり顔はその人を判断するために必要な個別の情報が集中している。

電話でも顔は見えないが、相手の出す声のトーンや音色によって相手の感情や微妙な気持などが伝わってくる。ところが電子メールだと文字情報だけなので相手の感情は伝わりにくい。つまり相手がどのような場所で、どのような感情をもって、どのような時に情報を伝達してきたのか分からないという欠点がある。また、ホームページを開くということ

は、それは電話帳に個人の電話番号を掲載するのと同じようなことではあるが、この場合は日本だけの通信ということになるが、インターネットは世界中のネットワークからアクセスしてもらっていいということ認めることになる。

それだけグローバルなネットワークにアクセス出来るということは、世界共通文化の共有という恩恵にあずかれる一方、自分をさらけだす結果となり、自分の好まない情報も、第三者から見られたり盗まれたりするということを覚悟しておかねばならない。

最近、若い人が面と向かってはほとんど何も話せないけれども、電話や電子メールだと饒舌になるというケースがある。コミュニケーションの基本は実際面と向かって話をする事なのだが、電話や電子メールを使ったほうが話しやすいという人が増えてきている。

電話の場合は受話器の向こう側に相手方がいなければコミュニケーションが成立しないが、電子メールの場合は向こうに相手がいなくても会話が成立する。つまりメディアを通じて相手と話をするのではなく、メディアそのものとしかコミュニケーションできないというような種類の人が出現していることは、メディア社会の影の部分だろう。

第3番目の特長は「情報はフローであり、知識はストックである」ということである<sup>5)</sup>。つまり、情報化とは、情報の収集能力・処理能力・伝達能力が飛躍的に増大することで、それを理解したり判断することを意味しないということである。

情報そのもののコンテクスト度は0に限りなく近く低い。このことはニュースは古くなると価値がなくなるという点で共通している。情報の中から恒久的価値のあるものが選び出され、蓄積され、体系化され、はじめて情報は文化になる。それは、おびただしい数の流行歌の中からスタンダードが生れていく過程に類似している。そして文化になった情報は知識と呼ばれるものになる。

情報化社会とは、コンピュータが普及し、ネットワークを形成する素地を有している社会のことで、そのネットワークからどのような知恵の体系を構築していくかということは、あくまでも人間の英知にかかっているのである。

#### [注]

- 1) 藤江俊彦「環境コミュニケーション論」慶應義塾大学出版会1997年 頁16～22
- 2) 富永健一「環境と情報の社会学」日科技連出版社 1997年 頁8～9
- 3) 加藤 寛「福澤諭吉の精神」PHP新書 1996年 頁184～185
- 4) 逢沢 明「ネットワーク思考のすすめ」PHP新書 1996年 頁140～141
- 5) 富永健一「環境と情報の社会学」日科技連出版社 1997年 頁211～214

#### [参考文献]

- 松岡正剛 監修「情報文化の学校」NTT出版 1998年  
 小林修一・加藤晴明「情報の社会学」福村出版 1997年